活動報告 令和6年 能登半島地震

令和6年1月1日に発生した令和6年能登半島地震は甚大な被害を及ぼし、多くの保健・医療・福祉チームが支援活動を展開しました。北海道理学療法士会は北海道JRAT（日本災害リハビリテーション支援協会のチーム）および北海道DWAT（北海道災害派遣福祉チーム）の構成団体となっており、1月から4月まで、多くの会員が北海道JRATとして派遣されました（北海道DWATはチームメンバー登録されている会員が6名とまだ少なく、当会からの派遣はありませんでした）。

今回は北海道JRATとして派遣されたお二人に活動内容を紹介していただきます。

現地活動本部での支援活動を振り返って

函館中央病院 相馬 栄大

令和6年2月4日から7日の4日間、能登半島地震での被災地支援に向かいました。被災地支援というと避難所支援を思い浮かべる方が多いと思いますが、私は現地活動本部（七尾本部）での支援、いわゆるロジスティック要員（Lスタッフ）として支援を行いました。本部での活動は、避難所を回っている地域JRATの調整、他団体との情報共有、各避難所から挙がっている要望のまとめと対応する活動チームの調整などです。私自身初めての支援活動で右も左もわからない中、さまざまな課題が次々と生じましたが、現地地域JRATのロジリーダーや一緒に参加していた地域JRATの皆さんと力を合わせてなんとか乗り越えることができました。また、これまで研修会で培ってきた災害支援に関する知識や心構えが非常に役立ちました。

今回、活動本部の支援に携わり感じたことは、自分の住んでいる地域の種々の状況を把握しておくこと、また各団体と平時からの関係性を築いておくことが非常に重要だということです。北海道は非常に広大な面積を有しており（九州と四国を合わせた面積よりも大きいです）、発災した際にはその地域のセラピストの協力が不可欠になります。災害はいつ起こるかわかりません。起こらないに越したことはありません。しかし万が一に備えて、「自分にはあまり関係ないから」と思わず、これからも災害支援についての知識を深めていき、自分の住んでいる地域の防災対策などもしっかりと把握していきたいと思います。現在、各支部や士会としても災害支援の研修会を開催していますので、まずは一度参加して、災害支援というものに触れてみてください。

他職種との連携の大切さ

函館中央病院 武田 恵李

「災害医療」にはフェーズがあり、発災直後から約72時間を第1期（被災混乱期）、4日目から1ヵ月末を第2期（応急修復期）、2ヵ月から6ヵ月を第3期（復旧期）、その後を第4期（復興期）として分類します。私が活動していた時期は、第3期の復旧期にあたり、多くの被災者が避難所から仮設住宅に入居し始めた時期でした。そのため、現地スタッフの人手が足りず、仮設住宅の家屋調査・動作指導を急遽依頼されました。

バリアフリーの仮設住宅でしたが、入居されても浴槽用手すりが設置出来ず、デイサービスを利用する必要が生じました。このようなケースが生じる度に様々な方面の方々に協力を仰がなければならず右往左往しましたが、その都度ご自身も被災者であるケアマネージャーや福祉用具の担当の方々に快く協力していただきました。こうしたことから、平時から様々な業者の方々や施設の方々、地域職員の方々とのつながりを作っておく必要があると感じました。

私はこの派遣に参加し、今現在の自分の技術・知識が役立つということが確認でき、これからも経験を積み重ね、受動的ではなく能動的に動いて欲しいという被災地域の方々が求めている要望に応えられるように、日々努力していかなければならないと強く感じました。